
2000字の世界

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2000字の世界

【Nコード】

N41520

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

週1更新。毎回、五枚。あと、毎回、テーマと禁則事項を決めて書く。来春の3月に終了。全120枚予定。

はじめに

はじめに

無言ダンテ先生の「五枚会」に触発され、スタートしたこの連載。週1更新。毎回、五枚。あと、毎回、テーマと禁則事項を決めて書く、というそういうの。

まあ、五枚というわしの場合コントが多くなると思うが、特に決めない。シリアスでもよし。まあでもコントが多くなるわな。資質的に。

ひとまず、第一回のテーマは反復文体（「ひっぽほっぽ武将」でやってるので掘り下げてみたい）。禁則事項は、暴力描写禁止（最近、通り魔の話が多いので）。

さっそく、今日から書き始めてみる。「五枚会」に習い、来春の3月に終了予定。全120枚。長丁場になるので、どうか適当に付き合ってください。

キムチ琉生ボンバー（前書き）

テーマは反復文体。禁則事項は暴力描写禁止。では、どうぞ。

キムチ琉生ボンバー

キムチ琉生ボンバーは中学一年生。とってもフアニーな女の子だ。愉快で元気さ。

この前なんて教室の机の上にうんこした。まあこれにはみんな引いたけどね。どん引きだよ。キムチ琉生ボンバーだけは大笑してたさ。すごいね。かっこいいよね。己の道を進んでる。人のことなんて気にしない。世間体なんてくそくらえ。社会の常識なんてくそくらえ。

でもそりゃ、そんなワイルドなキムチ琉生ボンバーにだって悩みはあるさ。女の子だものね。好きな男子がいるんだ。同級生で、新田勝彦という。

その勝彦がいやなことを言う。

「キムチ琉生ボンバーちゃん。男子ならともかく、女の子が机の上にうんこなんかしちゃいけないよ。そんな下品でエキセントリックな子、ぼくは嫌いだ」

キムチ琉生ボンバーは落ち込んでしまったね。

居酒屋で酒を浴びる。酒っていつでもノンアルコールのだけど。

「ういゝ大将。酒だ酒だ」

「キムチ琉生ボンバーちゃん。もうおよしよ。身体壊してしまおうよ」「うるへ」

キムチ琉生ボンバーは、悔しくて悔しくて、新田勝彦にいやがらせすることにした。好きな男子だからってヨウシヤしないとこが、キムチ琉生ボンバーのいやなところ。

まあやることはあまり変わらないけどね。新田勝彦の机の上に、うんこをしたのさ。

「うわああああん。うわあああああん」

新田勝彦は大号泣ってわけさ。情けない男子だね。キムチ琉生ボンバーはちょっと悲しくなったね。あたし何やってんだろと自分の

ことが情けなく思えてきたね。

確かに女の子として失格かなあとちょっと思うキムチ琉生ボンバーさ。まあ作者としては別に男子でも机の上にうんこするのは反則だろうと思うけどね。けど、あの子、人の言うこと聞かないから。性格というのは簡単には治らない。そりゃそうだ。それが人間さ。オレたちはロボットじゃない。

キムチ琉生ボンバーはしばらくは大和撫子みたいにおしとやかに生きていたが、ストレスがたまり、校長室を掃除中、我慢できずに、校長先生の机の上に、ぶりぶりぶりぶり、うんこをしてしまったってわけさ。

ただね。まずいことが起こったんだ。校長には生徒に内緒のやばい癖があったのさ。

それは、うんこを食うという癖。まあ、校長という役職も責任重大でストレスが大きいからね、そういうやばいことを趣味にしてしまうものさ。それが人生さ。

今までは、家で妻のうんこを食うだけだったんだ。

でも、校長は机の上に乗ってるこんもりしたキムチ琉生ボンバーのうんこを見てるとたまらんくなってきてね。

つい、ナイフとフォークで食べてしまったのさ。

それがやばいことに、キムチ琉生ボンバーに見つかった。キムチ琉生ボンバーも人間だからさ。さすがに学校のボスにやばいことすると今後の学校生活がやばいことになると思って、うんこを片づけに再び校長室に来たんだ。すると、校長がうんこをナイフとフォークでおいしそうに食べてるではないか。

「こ、校長先生！あたしのうんこ！」

「な、何。これは君のうんこかね」

「はい」

校長は、泣き喚くのさ。

「お願いだ！もっとうんこをしてくれ！食べたいんだ！たまらないんだ！」

キムチ琉生ボンバーはきもくなってきたね。何て変態な大人だろうと軽蔑したね。

ったく。うんこを机の上にする変態女子中学生がよく言うよ。キムチ琉生ボンバーは、ファニーな女の子だ。愉快で元気さ。だから、校長にファニーな提案をしたのさ。何かって。聞いて驚くんじゃないよ。

キムチ琉生ボンバーのうんこを一個二千円で売るというんだ。

校長は「五千円出す」と言ったよ。頭がおかしい。

しかし、大人は悪いね。ずるいね。

キムチ琉生ボンバーがうんこをして袋に入れてロッカーにしまつておいたら、盗まれていた。

キムチ琉生ボンバーはまさか、と思い、校長室に走った。

「こ、校長先生！あたしのうんこ！」

「な、何のことかね。むしゃむしゃ。これが君のうんこだという証拠はあるのかい？むしゃむしゃ」

「こいつ」

しかし、食べ終わってしまい、校長は泣き喚くのさ。

「お願いだ！もっとうんこをしてくれ！食べたいんだ！たまらないんだ！」

キムチ琉生ボンバーは怖くなってきたね。こいつもう人生終わってるなと軽蔑したね。

ったく。うんこを大人に売ると変態女子中学生がよく言うよ。

キムチ琉生ボンバーはファニーな女子。元気で愉快さ。

だから、校長に言ってやった。

「うんこばかり食べてると、うんこ星人になっちゃうわよ」
大人は懲りないね。

校長にまた売りつけようと思って、キムチ琉生ボンバーがうんこを袋につめてロッカーに入れておいたら、また盗まれた。

校長室のドアを蹴飛ばすキムチ琉生ボンバー。

「こ、校長先生！あたしのうんこ！」

「うにゆ？うにゆにゆにゆ？にゆ？」

そこには、うんこをむさぼり食う、全身茶色で異臭を放つ恐怖のうんこ星人がいた。実に不気味だ。キムチ琉生ボンバーは恐ろしくなって走って逃げたってわけさ。こんな話、絶対教科書に載らないよね。

キムチ琉生ボンバー（後書き）

次回のテーマは、「恋愛要素があること」の予定。禁則事項は、シモネタ禁止。普通だね。

聖吉&琉衣（前書き）

テーマは恋愛。禁止事項はシモネタ・エロネタ。では、どうぞ！

聖吉&琉衣

聖吉はすぐすぐ悩んでいた。吉本の妹に恋してるのだ。

名前は琉衣。目が大きくて髪がさらさらのかわいい子である。

しかし、琉衣はまだ小学六年生。聖吉は吉本と同じ高校一年生。

いくら何でも歳が離れすぎてる。

しかし、吉本の家に遊びに行き、琉衣を見るとハートがずきゅーんと撃ち抜かれる。

恋愛に歳なんて関係ないのだな。それにしてもつらい恋だと聖吉はとほほほな気持ちになる。

二人がぐつと近くなったのは、ある日の夕方のこと。

カラスがかあかあ鳴いている。聖吉は学校帰りであった。

すると、前方に琉衣が。エコバッグを肩に下げてるので、お使いだろうか。

しかし、様子がおかしい。茶髪の二人組に何か話かけられてるのだ。

「なあなあいいじゃん。オレらと遊びに行こうよ」

「いや！離して！」

聖吉は二人組の一人の腕を空手チョップし「やめろ！いやがってんじゃない！」と叫んだ。

「なんだこいつ。調子こきやがって」

聖吉は、これはケンカになるなと思ったが大丈夫。聖吉は空手の初段を持ってるのだ。

結果、聖吉は二人組にボッコボコにされた。二人組は空手の二段所有者だったのだ。

倒れる聖吉に琉衣が駆け寄る。

「せ、聖ちゃん！」

「いてててて」

痛い目にあったが、聖吉と琉衣はだいぶ距離が縮まった。もちろん

ん付き合うとまではいかないが、ある日、二人は遊園地へ行った。実に楽しかった。ジェットコースターに乗ったり、ソフトクリームを食べたり、聖吉はデートというのが初めてだったのだ。無論、琉衣もである。

ああ琉衣が彼女だったらなあと真剣に思う。しかしオレは高1。琉衣は小6。てんでダメです。これは。

結局、デートもそれが最初で最後。聖吉と琉衣はよいお友達という関係。

聖吉は授業中、暇さえあれば、琉衣のイラストをノートに描く。琉衣。琉衣。琉衣。

聖吉は切なくて切なくてたまらない。

聖吉は吉本に「光子がお前のこと好きらしいぜ」と言われた。

光子はロングヘアで目が垂れ目のなかなかかわいい子だ。悪い気はしない。

「何だよ。乗り気じゃねえな。他に好きな子でもいるのかよ」

まさかお前の妹が大好きなんだとは言えない。「べ、別にいねーし」

「じゃあ付き合えよ。光子、喜ぶぜ」

聖吉は仕方なしに光子と付き合うことにした。琉衣のことは諦めよう。

ある夕方。学校帰り、聖吉は光子と腕を組んで歩いていた。すると、前方からこちらに視線が。

琉衣だ。エコバッグ持ってる。お使いか。

聖吉はなぜかいやな気分になった。「あら。吉本くんの妹さん。かわいい」琉衣は二人をじっと見て、しばらくして「うわああん。聖ちゃんのバカああ」と泣いて走って行った。

な、なんだ今の反応。まさか琉衣、オレのこと。

その夜、部屋で聖吉は悶々としていた。光子のことなんててんで考えちゃいない。琉衣のことで頭がいっぱいである。

琉衣。琉衣。琉衣。

聖吉は、「チキショー！」と叫び、壁をどんどん叩いた。神様ひどいよ。こんなのってないよ。

小学六年生になりたいと真剣に願う聖吉であった。

「ん？小学六年生？」

聖吉はぴーんときた。

「小学六年生になっちまえばいいんだ！そうすれば、琉衣と付き合うことができる！」

聖吉はさっそく、押し入れの奥から古いランドセルを引っ張り出した。

そして、翌朝、聖吉はきつつきのランドセルを背負い、プリン西高校ではなく、琉衣の通うプリン小学校へ向かった。

聖吉は高校生活をなぐり捨て、小学六年生として生まれ変わったのだ。

教室に一人だけかい小学生が座る。すなわち、聖吉。琉衣は聖吉を眺め、びっくり半分うれしさ半分という感じだ。

放課中、琉衣が聖吉に話しかけてきた。

「びっくりしたよ。聖ちゃんが小学校にいるんだもん」

「これからよろしく頼むよ。なんせ久しぶりだからね。慣れなくてさ」

聖吉は教科書を持ってなかったので琉衣に見せてもらった。

聖吉はなかなか人気だった。そりゃそうだ。身体は高校生だからスポーツが小学生よりできるし、勉強もできる。男子に頼りにされるし、女子にもてる。

琉衣はちよつとさびしいなあという気もする。あたしだけの聖ちゃんだったらよかったなと思う。

でもあたし別に聖ちゃんの彼女じゃないから我慢しなくちゃとも思う。

聖吉は実に楽しい愉快的小学校生活を過ごしていた。高校では成績は中の下。スポーツも普通。しかし、小学校ではスーパ－小学生として成立するのだ。楽しくないわけがない。

琉衣と付き合うことなんてすっかり忘れてる。琉衣がさびしい気持ちもわかる。

しかし、まあ楽しいならいいのかな？

しかし、やはり楽しいことなど長くは続かない。二ヶ月ほどしたとき、聖吉はだんだんつまらなくなってきたのだ。それはそうだろう。身体や頭は高校生のわけである。小学生と同じことをしてそもそものが楽しいわけではないのだ。

しかし、小学生になってしまった以上はどうにもならない。次第に聖吉はどんよりしてきた。

琉衣はそんな聖吉が心配で心配でならなかった。たまに疲れてる聖吉の肩をもんであげたりした。

「聖ちゃん、こってるね」

「本当に高校生にとって、小学校生活は地獄さ」
早く高校に戻れよ！！！！

聖吉&琉衣（後書き）

次回のテーマは推理小説。禁止事項は、犯人を当てない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4152o/>

2000字の世界

2010年10月20日21時10分発行